

動物に  
好かれ  
まくる

# 1体質の少年、 ダンジョンを探索する

配信中に  
レッドドラゴンを  
手掛けたら  
大バズり  
しました！

2

Momiji Minase  
海夏世もみじ

## ムキムキピーマン

“熟成”して人型になった  
ピーマンの魔物。



## 黒岩牙狼

有名クラン“シャドウファング”  
のリーダー。キレイな年頃。

## 彩芭ラブソディー

謎の地下組織、超電脳狂詩曲を束  
ねるボス。電脳世界で暗躍している。

## 雨波ルハ

とある組織に属する美  
少女暗殺者。忍者のよ  
うな戦闘スタイル。

## 天宮城美玲

超人気美少女配信者。配  
信者名は“あまみや”ちゃん。  
もふもふ好きだが、もふもふ  
からは好かれない。

## 鬼蛇穴凜理

見た目も口調もカンベキなお  
嬢様。だがその本性は……。

## 藍堂咲太

本作の主人公。女の子のような見  
た目で、動物に好かれまくる体質を  
持つものの、いたって普通の高校  
生。ひょんなことからダンジョン配  
信を始めるようになった。

# 登場人物紹介

## 第1話

深層二階のボスを撃破したあと、僕、藍堂咲太はダンジョン内をズンズン進んでいた。だけど、なんだか雰囲気が変わったような気がする。

僕のあとについてきていた魔物たちがバタバタと倒れ出し、妙な気配が奥から感じられる。

「みんなだらしないなー。急に寝ちゃって」

..異常だよな?

..「だらしないなー」で済ましてるサクたんが異常w

..なんかうなされてるくね?

..少しば慌てなさいww

..精神汚染系の攻撃っぽいな

..→じゃあなんでサクたんには効いてないん??w

..まだバナナのこと考えてる顔してるし……

「精神汚染とかあるんですね……。まあ僕の脳には今、『電子鰐』がいるので心配ごむよーです！」

..体 内 で 飼 育 し て る

..そ う 考 え る と 強 い な あ …… w

..寄 生 虫 を 体 内 で 飼 う 人 思 い 出 し た w w

..怖 い よ う

..精 神 攻 撃 無 効 化 ツ ! w

実は、うなぎ以外にも二匹の幻獣が僕の体内にいる。

一匹は僕からだいたい500ミリリットルの血がなくなつた時に現れる子で、もう一匹は僕のどこかしらの体の部位が消失した時に現れる子だ。どちらも慣れ始めたら、涼牙を呼ばなきやいけないくらい大変だし、大人しくしてほしいね。

# # #

それはさておき、その後もダンジョンを進んでいたのだが、やはりどの魔物もうなされているようについてくることはない。

同じ影響なのか、以降の階の魔物もスルーすることができた。

「はあー……疲れた。けどここがラストですね！」

延々と歩き続けること數十分、とうとう第七階層のバス部屋の前までたどり着く。

..い よ い よ だ な ……

..なん で 魔 物 の サ ポ ー ト な く て た ど り 着 け て ん だ よ w

..サ ク た ん つ て た ぶ ん 豪 運 体 質 で も あ る よ な

..不 幸 体 質 で も あ る よ う な ……

..→ ど ち ら も あ り う る 、 そ ん だ け だ

..お 前 ら 備 え る ツ !

..ボス部屋入るぞく

..これ が ラ ス ト バ ト ル か

ボス部屋に入ると、そこには紫色の靄のようないきがいた。目はないのだが、こっちを確かに見ているような気がする。これが七階のボスなのだろうか？

「んー？ あれなんですかね？」

..確 か 、 ザ ・ ナ イ ツ メア つ て 魔 物 だ つ た 気 が す る

..ス○ンドみて、な名前だな  
..海外のダンジョンでも見つかった奴よな?  
..夢空間に連れていく、そこで戦闘になる。時間内に倒せなかつたら、永遠に悪夢に囚われ  
る……とかだったよくな?  
..じゃあ今のサクたんには効かねえな!  
..勝つたな。風呂を食え

..いや、しかし様子がおかしいぞ? (英語)

..私たちの国で自撃されたものはもつと小さかつたよくな…… (英語)  
..まずいぞ。それは強化個体かもしれない! (英語)

しばらく様子を見ていると、靄を中心<sup>もや</sup>に空間が塗り替えられていった。  
その空間は一面がモノクロの世界で、大都市のようだが木々が生い茂り、<sup>つた</sup>蔦がはびこっている。  
どこか懐かしい感じがする。

そして靄はボコボコと音を立て、違う姿へと変身していく。

「そ、そんな……あれは……?」

『オ、ア、ア、ア、ア……!!』

「い、イヤだあああ～～つづ～～～～～」

緑と紫の体色でギヨロギヨロとした目玉や口が付いた僕の天敵……もとい、ピーマンがそこにい

たのだ。

..天 敵 降 臨

..やはりピーマンが立ちはだかるww

..キモすぎるww

..人型 + 多眼 + 悪い体色 + 奇声

..前回のピーマン戦、サクたん負けてるからなあ……

..【悲報】ボスの強化個体、ピーマンの姿になる

..サクたんメタで草

..もう終わりだねこの配信w

..さしづめ、"ナイトメアピーマン"といったところか

# # #

——深層七階ボス、ザ・ナイトメア。

本来ならば自らの夢空間でのみその力を發揮する魔物だが、強化個体のために、悪夢の力は現実にまで干渉する。

強化の第一段階は、対象の心の空間を現実に展開。第二段階、対象が最も恐れるものへの形態変

化。そして第三段階、対象を内側から蝕む。

「あば、あばばばば!! どどどどうしよう……と、とりあえず誰か来てーー!」  
すでに第三段階、その心の蝕みは絶大であった。

咲太の心を悪夢で染め上げる。

つまり、咲太の場合は、『ピーマン』で埋め尽くされていた。  
だが彼には、心で強くイメージした幻獣や魔物を、『鍵』で『扉』から呼び寄せることができる  
という、特殊な能力があった。

つまり、心で強くイメージしてしまったということは——  
『ピ、ピマアン……? ? ?』

..ム w キ w ム w キ w ピー w マ w ン w  
..お前、あの時の……ツー w

..ピーマン「待たせたなあ！」

..帰つてくれw

..やめろピーマン！ 戻れ!!

..相も変わらずシックスパックがお美しい

意図せず呼び寄せられてやつてきた魔物——咲太が料理配信の時に会った、ムキムキのピーマン

である。

巨大なピーマンに手足が生えているというその異様な姿を見てしまい、咲太はもうだめだった。  
——バタンッ。

気絶してしまった。

..え、あ、あれ？ サクたーん?  
..これつてもしかしてだけど……  
..めつっちゃ。ピンチでは!!  
..起きろサクたんんんん!!——!  
..サクたんが起きてないと幻獣召喚できない。他の階層の魔物はうなされてる  
..ピーマンなんとかしてくれえ!! w  
..深層強化個体ボスとかいう無理ゲー  
..ピーマンの荷重すぎんだろ！

『ピマピマ……ピイマピイーマン』

ピーマンは咲太の前に立ち、ナイトメアから守ろうとする。

..守ろうとしてくれている……!?

..盛り上がりつてきた

..何言つてるかわからんねえーww

翻訳マン：（状況がまだわからないうちに）って言つてるぜー。

..→キッショ、なんでピーマン語わかんだよw

..翻訳マン、同時翻訳しろ。

翻訳マン：わかった！

『（この少年はピーマンを食べてくれた優しき少年だ。手を出すことは許されんぞッ！ うおおおおおおお！』』

——パキヨツッ!!

ナイトメアの拳がピーマンの腹に当たると、良い音が鳴つた。ピーマンは中に詰まつていた小さな粒の種を撒き散らしながら天井へ吹き飛ばされた。

そして、ナイトメアは一步二歩咲太に近づく。

..ピーマアーナン!!!!

..やつぱり、ダメだったよ

..ま、待て、ナイトメアピーマン。鼻☆塩☆塩（はなしをしよう）

..や、やめてえ……

..やばいやばいやばい

..助けが来ねえ！

..まあ深層七階だし……

..ボスだから体質もやっぱ利かないじやん

リスナーは無力にもただ見続けることしかできない。

そしてとうとう、ナイトメアは床に横たわる咲太の側まで来てしまい、腕を振り上げる。

『ア……ハハ……ッ!!』

..やめろおおおおおおおー！

..終わつた

..だからやめとけつて……!!

..もう無理

..ああ……

——ドゴオオオンッ!!!!

瞬間、ダンジョンが大きく揺れるほどの轟音が響き渡つた。

『……“アア……?』

..あ……?

..なんだ?

..サクたんが殴られた……わけではないっぽいな

..じゃあなんの音だよ!?

..誰でもいいからヘルプヒム!

..早く今のうちにい……

ナイトメアは顔を上に向け、音の正体を確認しようとする。

轟音は再び鳴り響き、それは遠くからどんどん近づく。そして、この階の天井が破壊され、彗星のようにならぬ轟音が降りてくる。

——ドガアアアアンッ！――！

それは高架橋の上に着地し、そこを真つ二つにしてみせた。

..うおおおおおー！――?

..登場の仕方がかつこよすぎるwww

..高架橋真つ二つにした……

..誰だ!?

..リヨーガか?

..“ゴリラ化したあまみやちゃんかもしけん

『ヴエ……、アアア!!』

——ヴンッ。ボグッ！――！

『ガハッ……！？！？』

それは亜音速で移動をし、ナイトメアの顔面に拳を振るい、ナイトメアを遙か遠くまで吹き飛ばす。

吹き飛ばされつつ建物を次々と貫通するナイトメアから、その誰かの拳の威力が強大であることが窺えた。

その者の体表からは煙が出ており、真っ赤に染まっている。

..お、お前は……!?

..なんで生きてんだよwww

..覚 醒 イ ベ ン ト

..私が来たッ!!

..さつきは笑つてすまん……

・ムキムキピーマンだ！――！

『ピマピマ……！――！』

駆けつけた者の正体は、先ほど咲太が召喚したムキムキのピーマンであった。だが、ピーマンであるのは頭部のみとなり、その体は鍛え上げられたボディビルダーのようになっていた。

また体表は緑ではなく、怒りに染まったかのように真っ赤になつてている。

・人型になつてる!!

..赤くなつて、熟してるwww

..ボス殴り飛ばしたぞ！？！？

..完熟モードだな

..強スンギw

..よし、仕事だぞ

翻訳マン：こつからが本番だな！ テンション上げて翻訳していくぜ!!

『(時は満ちた……そして、私は「熟成」したッ!! 子供たちの健康を望む全緑黄色野菜の代表として、この少年は私が守つてみせる！――)』

『ゲゲ、ゲゲ……ギヤギヤギヤギヤー――！――！』

Eランクの「食料庫の迷宮」(ダンジョン)で遭遇したムキムキなピーマン。

なお、Eランクダンジョンで現れるには明らかにおかしく、ゆえにこの魔物はイレギュラーであるが、この深層での戦闘についていけるほどの強さはない。

……通常ならば。

だが制限時間内の制限解除(リミットブレイク)、もとい「熟成」した状態ならば、万物を破壊し、全てを蹂躪(じゅうりん)できるほどの力が引き出せる。

そう、かのXランク探索者の高力涼牙に並ぶほどの戦闘力を引き出すことが可能となるのだ！

『ヴガアアア――！――！』

『ビタミンCパンチッ――！――！』

ナイトメアは触手を伸ばして攻撃を仕掛けるが、ピーマンが拳を振るうとその触手は蒸発した。ピーマンは再び距離を詰め、ナイトメアの腹に拳を打ち込んで吹き飛ばした。

『少年少女たちの教育に悪い見た目だな。手つ取り早く貴様を葬り去つてやろう』

この魔物は新種の魔物、それゆえに、発見者が名付け親となる。Sランク級の魔物ざえをも凌ぐこの個体名は――「ムキムキピーマン」となつた。

..少年少女を助ける魔物、ムキムキピーマンッ!!

..ピーマンがこんなにカッコいいと思う日が来るとは思わなかつたww

うし、ピーマン買つてくるわ

□ないのになんでしゃべれでんだけ……?

→ 真のピーマンだからだよ

真のピーマンつてすごいんだなあ

ムキムキピーマンしか勝たん♡

このままだとムキムキピーマンファンクラブとかいう謎組織が生まれてしまつww

『ギガア……!! ジャア、マ、ス……ルナアアーネツ!!!!』

『怒つて血圧が上がつているようだな！ カリウムが足りてないんじやないのか!?』

——ズガガガガガガガガガガガガガンッ!!!!

ピーマンはナイトメアの猛攻を両手の人差し指と中指だけで捌ききつていた。

だが時間が経つにつれ、ナイトメアの攻撃のスピードと威力が上がり、周囲の建物が壊れ始める。

『(フム……ここは少年が近くて危ない。場所を変えようかッ！  $\beta$  カロテンキック!!)』

脚で横薙ぎ一閃。

ナイトメアは後方に吹つ飛ぶ。それに次いでピーマンは足を踏ん張り、クレーテーができるほど

の力で地面を蹴つて、ナイトメアを追う。

..おおお！？

..すんげーバトルww

..俺たちは何を見せられてるんだ……？

..ナイトメアピーマン VS 熟成ムキムピーマンだよ

..ナニコレえ

..見る無む量りょう○処しよ

..つてかピーマンの方にこのカメラ向かうんやな

..撮れ高がわかつてる配信用カメラだなw

..実際そう

..頑張れ——!!

『ギア、アア！！！！』

『(ど)を見ている?』

『!!』

ナイトメアは空中で体勢を整えて正面を向くが、そこにはピーマンがいない。

その渋い声は、ナイトメアの背後から響いていた。

ナイトメアが振り向く時間も与えず、ピーマンの重い一撃が再びナイトメアの顔面に炸裂して、ナイトメアは地面に叩き落とされる。

『オ、オオ……!! ゴ、ロス……！……』

『私は子供たちの健康を守るために存在している。まだ死ぬわけにはいかない。さあ、ここなら存分に暴れても構わんna!!!!』

深層七階のボブ戦は また始またはかりである

第2譜

咲太から離れた場所で睨み合うナイトメアと熟成ムキムキピーマン。ナイトメアは警戒した様子のまま、攻撃を仕掛ける様子はなかつた。  
（あい）

対してピーマンは顎に手を添え、感心した様子でいる。『(……なるほど。いつの間にやら実を作っていたようだな)』

「『ギヤギヤギヤギヤ!!』」「全方立かう、大量の小型ゴリ

それらは紫色で、蝙蝠の羽が生えている。口が付いているので叫べるようだ。

..キモツ！

・ トキワガタのトキワ

..つてかこれやばくないか?

..囮まれてるやんけ！  
..負けるな。ピーマーン

『(……数が多くて厄介だな。 フンツ！ ヌンツ!!)』

ピーマンは一体、二体と次々に小型のナイトメアピーマンを蹴り飛ばしていく。そして蹴り飛ばすスピードを上げ、次第に回転が生まれる。

——ビュオオオオオツツ！――

地面のアスファルトが剥がれ、ビルのガラスは割れ、木々は根ごと巻き込まれ……ピーマンが引き起こした嵐が、ことごとくを巻き込み始める。

ナニコレ

…→ブレイクダンスだが？

：「もつてない」=「マジ一派でない」=「どうが……」

「つてかよくこのカメラは耐えたな  
..童券の中心にいたから大丈夫だつたらしい

『オ、マエ……!!』  
『(H A H A H A !! 最後の晩餐会だぞ！ 存分にピーマンを味わうがいい！――)』  
『ツ……!?』

ピーマンが拳を振りかざした途端、ナイトメアは跳ねて横に回避しようとする。  
しかしその一瞬を見逃さず、ピーマンは拳を地面に振り下ろした。  
——ズガアアアアアンッ！――！

すると地面は真っ二つに割れ、それが左右に隆起して壁のようになつた。  
ナイトメアの逃げ場がなくなる。

逃げ場を失い狼狽する暇もなく、ピーマンの拳が再びナイトメアにクリーンヒット。ナイトメアは体を吹き飛ばされ、ビルに衝突した。

だが、ナイトメアは急いで姿勢を立て直してビルを離れる。

『(ビタミンE手刀！)』

すると、キンッという音が響いた。

ピーマンの一撃でビルは斜めにスライスされ、ゆっくりとスライドしながら落ちていく。

..ええ……(ドン引き)

..これがEランクダンジョンにいたつてマ????W

..化け物エ……

..ビルがスライスされたWW

..ピーマン最強！ ピーマン最強！

『殺、ス！――！』

『(そういう言葉は使わないでもらいたい。子供が聞いたらどうする？)』

『アアアアアア――！』

ナイトメアはボコボコという音を立てて拳を肥大化させ、ピーマンにそれを放つ。一軒家ほどありそうな拳だ。

……だが、ピーマンはその上をいく。

スライドしてきたビルを片手で受け止め、掴み、叩きつける。

『ヌオオオ――ツ!!』

——ドツツゴオオオオオオオシツッ！――！

ビルを武器のように振り下ろし、ナイトメアはその圧倒的重量の下敷きとなつた。

しかしながら、さすがは深層のボスといったところか。まだ息をしており、うな隠りながら瓦礫の隙

間から這い出でくる。<sup>は</sup>

ア……ア……!! シヤ、マ、スル

（一）も（一） 終わりにしよう

二三

両腕に力が込められてビキビキと音が鳴り、プシユーッ<sup>ゆげ</sup>と湯気<sup>湯けい</sup>がさらに上がる。その巻のエネレギーは言はずらがな、ナイトマアこ作製<sup>つくり</sup>こ。

## 『（クエルシトリンラツシユ!!）』

体を全て削り取る勢いで拳を放ちまくり ナイトメアを天井まで吹き飛はす  
一瞬静寂に包まれたあと、ピーマンは人型のまま、その体色が赤から緑へと戻った。

卷之三

.. やりやがつた WWW

【超速報】深層七階ボス、ピーマンが撃破…

：ムキムキーマン——！

理解できぬ

連続。ピーマンパンチ威力えつぐ

これにて一件落着……とはならなかつた。

ピーマンは天井を仰ぐ。あお

ビ「……」は力丸を仰ぐ。するとそこには、巨大な渦を纏うナイトメアの姿があつた。力をその渦に収束させているのか、時折縮妻が走つて禍々しい様子だ。

『ゼ、ンブ……消シ炭ニ、シ、テ、ヤル!!』

『（フムフム……。これは——諦めるしかないようだ）』

..まだ生きてたんか

..ムキムキピーマンでも勝てないの?

..マジかよ……

..けどあの形態は本気でやばそ

..本当に終わり?

..最悪だよ……

リスナーたちも諦めムードになり始めている。

ナイトメアが渦を巨大化させる一方、ピーマンは言葉を零す。

『無傷で勝ち、ピーマンの強さを感じてもらい、健康体の模範となりたかった……。だがもう無理なようだ。ああ、諦めよう。——無傷で勝つのは諦めようか……!!』

腰を据え、右拳を握り、左手で包む。

もう熟成モードは使えない。

だが、右腕だけを真っ赤に熟成させた!

『(少年は必ず守る。たとえこの実がボロボロになろうとも、勝利を少年に届けるのさ!!)』

ピーマンは真っ赤に変色している右腕に、さらに力を込める。湯気が上がり、さらにはバチバチと稲妻も溢れ出ていた。

『(……おそらく、奴の攻撃を回避することは可能だろう。だが、避けねば少年がどうなるかは目

に見えている。ここで私が……奴を仕留めるしかない……!!)』

..頑張れピーマン!!

..今日野菜炒めにするからあ!!

..勝つて! 勝てや! ムキムキピーマン!!

..流れ変わったな!!

..【朗報】ムキムキピーマン、奥の手を繰り出す模様

..ピーマンはなあ、負けないんだよ……!!

..ここまで頼もしいピーマンがいただろか。いやいない (反語)

..ピーマン嫌いなのにつ! ピーマンに惚れちまうよ!!

ナイトメアとムキムキピーマンは、互いに力を蓄え続ける。

ナイトメアはブラックホールのように全てを包み込みそつな渦。ピーマンは暗い宇宙の一等星がごとく煌めいていた。

『悪夢、ヲ、蔓延、サセル……。夢、ヲ……コナゴナ、ニ、シテヤル……!!』

『(H A H A H A H A H A !! 私の夢を粉々にする、か。言つてくれるじゃあないか……。良いだろう、冥土の土産に教えてやろう。私の夢をな)』

高笑いをしたあと、ピーマンはポツリポツリと語り始める。

『(私の夢は、全世界の人間の子供たちの体を健康にし、長生きさせることさ。人と魔物、そう簡単には相容れないことは重々承知だ。だが、叶えてみせたいのさ)』

『夢、ナド……馬鹿馬鹿、シイ!』

『(……夢に想いを馳せ、ひた浸るのは大いに結構だろう。だが貴様の言う通り、夢に浸り続けて溺おぼれるのは間違っている。ぬるま湯に浸かり続けるのは良くない。……だから、だ。だから私は、今、此處で! 夢を叶えるため、ぬるま湯から上がり、貴様けんじと向き合い、戦い、勝つて——夢への一步を踏み出したいのだ!!!!!!)』

..カツコよwww

..名言いただきました

..ピーマンが言つてゐるつてなるとジワジワくるw

..かつちよいだるオ??

..ピーマン、お前第二でもいいから主人公になれ

..てかもうそるやばそうだな

..発射しそうじゃね?!

——ゴゴゴゴゴゴゴゴ……!!!!

地響きが大きくなり始める。

ナイトメアの渦が天井一面に広がっているのに対し、ピーマンは地面にクレーテーができるほど

のエネルギーをチャージしていた。

互いに、臨界点間近である。

『(私の夢は叶えられそうにないほど馬鹿げているだろう……。だが叶えたいのだ……! HAH A、あの少年一人救えないようだつたら、この夢を叶えられるわけがないんだよなあ!!)』

『モウ、イイ。消エ、口』

『安心してくれ少年……。必ず——守るさ)』

——バチツ、バチツ……!!!!

ナイトメアの渦の中心に、混沌こんとうとした色のエネルギーが収束し始めていた。ビルは大きく揺れ、

しかしピーマンのやるべきことは一つ。拳を振るうのみ。

『(我が最高の奥義おうぎ……緑黄色苦神滅拳りょくおうよくがみめつけん——)』

『消エ、失セロオオオオオオ——ツ!!!!』

——ドヴッ!!!!

ナイトメアの収束されたエネルギーは光線となつて放たれた。当たれば一瞬にして蒸発しかねないほどの威力が詰まつている。

だが、ピーマンは臆することもなく、赫かくしゃく炎する拳をその光線に向かつて——放つた。

『(——クリ理虚飛ヨシ元スル)』

刹那、世界から色と音がなくなつた。  
理も、虚空すらも全てどこかへ吹き去

理も、虚空すらも全てどこかへ吹き飛んでいたのではないかと錯覚してしまったほどに。だが次の瞬間、

「ハジケル耳が——！」

どうなつたん……?

よくわからんが……なんか  
明るい?

・頃心

一  
束

→迎えな

..あ、見えたぞ！

『――…：敵ながら天晴れであつた。この私の葉緑体に刻み込まれたほどだ』

天井にはナイトメアの姿はなく、代わりに深層七階より上の全上層をぶち抜いてダンジョン外の陽光が差し込んでいた。

# その陽光に照らされるは スポーツライター

..ムキムキビーマン——つ==

片腕がなくなり、傷だらけになりながらも立ち続けるムキムキピーマンの姿がそこにはあつたのだ。

今度こそ、紛れもなく勝利を手にした。

#  
#  
#

「う、うーん……？」

なんだか変な臭いがするような……。まるでピーマンに包まれているかのような変な感じがする。そう三本と准ひらるべ、矣失へよ三一、あらかじめ用ける。

その正体を確かめるべく、僕——咲太は重い瞼を開ける。

いつの間にか外に出ていたのか 太陽の光で体はホカホカとしていた  
そして周りを見てみるとそこには――

## 『ビーマ・ピーマ・アン!』

ムキムキピーマンが僕の顔を覗き込んでおり、僕は咄嗟に悲鳴を上げてしまう。

..サクたん！ そのピーマンは良いピーマンだぞ！

..助けてくれたんやで

..七階ボス倒したからなww

..感謝の意を込めてピーマン食え

..ピーマン！ ピーマン！

..ピーマンイズゴッド

..時代来たね〜

「リスナーさんたちがピーマンに洗脳されてる……!?」

だんだんと思い出してきたけれど、今僕が生きているということは、本当にこの人型のムキムキピーマンがあの気持ち悪いピーマンを倒してくれたってことなのだろう。右腕とかもないし、頑張つてくれたみたいだ。

すごいなあと感心していると、突然ピーマンは左腕で僕を包み込み、抱き上げた。

「な、えつ!?」

『ピィマビマ、ピママピーマン……』



翻訳マン…（少年が無事で、本当に良かった……）って言ってるぞ…

マーラン

· 漢書 ·

• 第二章

→そのネタが否定しきり、珍しい状況だwww

…ピーマン、お前がMVPだ

その後、鍵によつてピーマンは元いたダンジョンに帰ることとなつた。

おのぞ木三はあいだと、今日はヒーハン家焼肉をと食べるよ!」

二二

۷۷۸۰

本当に不思議な魔物だったなあ。ビーランは苦手

——こうして、近所で起きた大氾濫は終息したのであつた。

第3話

——シャドウファンジング本拠地にて。

その一室で、配信を見ながら叫び声をあげる人物がいた。  
スタン

この男こそがシャトウアンケのリーダーであり、大混濁を人工的に起こす計画を立てた人。  
（こういわが ろうとう　じょ）

至つてはなんだあのピーマン！ クソが!!

ドカツ、と近くにあつた椅子を蹴り飛ばして破壊する。

東京での大活潑は、駆動ゼロの活躍によって被るにいにゼロに等しい  
モノ。『スタンビード』は矢張二二二、皮著は建物の廻廊ミナハ、諸ノダ。

しかしそれだけではなハ。シャドウファシングが独占していた深層の情報が、今回の配言によつて

おおやけ  
さら  
公に晒されてしまつたのだ。

これにより、このクランの損失はとんでもないことになつた。

クソツ、クソツクソツ！ サクたんとかいう配信者……！ オレたちが念入りに計画してきたも

のをぶち壊しやがって！……覺悟はできてんだろうなアおい！」

シャドウファンジングの邪魔をした者、スペイ、裏切り者などは全員、この世から消されているか、社会的に生きていけない制裁を下されている。

この牙狼という男は、言動こそアレだが、計画を念入りにしてほぼ確実に成功させる男だ。

「サクたん、動物に好かれまくる体質で幻獣を侍らす配信者……。真っ向勝負をしなくとも、違う方法で殺すことだって可能だ。ククク……せいぜい今を楽しんでおけよクソガキ……！」

次の標的が決まった瞬間だった

# # #

「よおお前ら、待たせたなあ!!」

ダンジョン内に響き渡る爽やかな声。

その正体は咲太……ではなく、この俺、高力涼牙である。

「リョーガだぜ！」

..きゅやー！

..SNSで見たぞ

..サクたんの代わりにこっち見るかあ……

..致し方がない  
..Xランクの配信は貴重なんだよなあW  
..でもリョーガだし……  
..チツ、しゃあねえな  
..ちょくちょく不評な「メあつて草

「サクたんが数日間謹慎処分になつたからな！ 代わりと言つてはなんだが、この俺が配信してやるぜー！」

俺が別の仕事で県外にいた際、咲太はSランクダンジョンの大氾濫<sup>スマッシュ</sup>を単独で止めてみせた。しかしアイツの探索者ランクはE。そのため、Sランクダンジョンに入ること自体違法だし、ましてやスタンピード中。

そんなわけで、処分がきつちり下されたのだ。県を救つた英雄として勲章も近い日に贈られるそ  
うだが。

チャンネルサクたん・お家で見てるから頑張れー！

「ガハハ！ お前の代わりに気張るぜー！」

暇してる咲太に「なんかしてほしいあるか」と聞いたら、「ダンジョン配信をしてほしい！」

と言わされたので、アイツにあげたカメラを一旦返してもうつてそれで配信をしている。

使い方は相変わらずわからないため、咲太に言われるがまま進めてなんとか配信にこぎつけることに成功した。ちなみにチャンネルもわざわざ咲太を作つてもらつた。

「今日はAランクダンジョンだな。まあこの俺がダンジョンのなんたるかを教えてやんよ」

上から目線キチ一

..サクたんを返せ

…まあ貴重だし……一応聞いたるか

卷之三

·第十一回·

..あくしろボケ

「なんでこんな好戦的なの」「イツら……」

リストナーニーの態度がびっくりするくらいでかいぜ……。俺のメンタルがもう少し弱かつたら泣

「えー、前も言ったかもしんねえが、上層はゴミだ！  
雑魚ばつか。さこだからショートカットする

真似しちゃよな!!

今後の方針

• 7

・※真以でまかし

これがXラジウム

つぱ人間じやねえ！！！

チャンネルサクたん…今度真似してみるね♪

..やめろサクたんww

…幻獣使えばできちやうんよなー…

..なんでもありだな

ボコスカと地面を殴り続けていると、広い空間へとたどり着いた。どうやらもうボス部屋に着いたみたいだ。

「えーっと、こここのボスは確か……」「ブルルルルルウ!!」

.. ギガントスライムだ！

物理攻撃無効のスライムだつけるか？

あれ、リリーが駄目じゃ……？

ヒルトの草

始めて此の角を上へ登るが、

..見せてもうおうか

「物理攻撃無効って説明で書かれてることあるよな? すんなつてことよ」

鶴呑みに

瞬間、ギガントスライムは弾け飛び、シユワア……と音を立てて蒸発して霧散した。ボスの攻略完了である。

もちろん鵜呑みにしねえよ。お前の言葉を  
やばすぎvv  
化け物さんこんにちは  
物理攻撃無効を無理やり物理で突破したvv

リヨーか、お前説明すんな  
教師とか絶対向いてないよw  
… そういえばだけど、ここ、物理攻撃無効が多いクソダンジョンじゃんね  
… 拳で万事解決漢

何やらリスナーどもは不満があるみたいだが、気にせずどんどんと下の階層へと下りていく。すると今度はひんやりとした空気に包まれ、不気味な声がこだまし始めている。

「才才才才……！」

——ガヴァンツ！――――――

半透明で下半身がない人型の魔物を殴ると、一瞬で消滅した。

..  
は?  
?

..待て待て待て

「ゴーストは完全に物理無効のはずでは?」  
「正攻法は聖水とか眩<sup>まぶ</sup>しい光で実体化とかだぞ  
」  
「すげー重低音鳴つたけど何した?」

.. Xランクなんだなあ（遠い田）

..持ち上げるべきなんだろうが、リョーガだからなんか嫌だ……！

..→わかるマソ

..図に乗らせてたくないよね

「お前らなんで俺のことそんなに嫌いなんだよ……。まあいいけど。えーっとだな、簡単に説明するど、空間だと消滅させるパンチをしただけだ！」

..トロトロ？？？

..はいはい、チート

..パワーがあればなんでもできるのねw

..筋肉イズジャスティス

だがこれは結構大変だし、習得するのにだいぶ時間がかかった。あのムキムキピーマンとやういちゅ素質があるだろうが、まだ経験が足りなさそうだしな。  
しかし、魔物どもはどれも雑魚ばかりだし、本当にこの配信が楽しいのかわからなくなつてき  
たな。

「質問でも受け付けるか。なんかよこせー！」

..どうやつてそんなパワーつけたん？

「知らんー、強いて言うなら筋トレー！」

..サクたんとの馴れ初めは？

「幼稚園一緒で、そこで話しかけてくれたことだな！ ちなみに昔のアイツはめちゃくちゃヤン  
チャだつたぜ」

..なんでXランクになつたの？

「趣味探しのなりゆきだな。自分でもよくわからねえ」

..好きな食べ物は？

「サクたんの手料理！ まあ無理な時は自分で炭酸水かけご飯食つてるぜ」

..え……？

..炭酸水かけたご飯……??w

..うふ

..質問がどれも参考にならぬ

..有益なのはサクたんの情報だけw

..イかれてんな

..筋トレとなりゆきでXランクになる奴草

..聞けば聞くほど誤がわからないな。コイツとサクたんw

質問を返しながら下へ下へと進んでいたのだが、ピタリと腕が止まる。「…………なんか飽きた！　帰るわ！！　お前らじゃーなー」

..え？

..ちょ、は？ w

..はやつ

..飽き性すぎる w w

..三十分坊主

..配信向いてねえな w

チャンネルサクたん..もう終わりかー

——ブチツ。

こうして、高力涼牙の初配信は幕を閉じた。

#### 第4話

大氾濫スタンピードの元凶である深層第七階のボスを倒し終えた数分後、駆動さんがわざわざやつてきてくれた。

て、無事に地上に帰ることができた。

配信の最後の同接数やスーパーチャット額がとんでもなかつたため、また気絶しそうになつたの

だけど、それは駆動さんしか知られていない。

そして、駆動さん、担任の先生、警察やダンジョン管理者からはこつ酷ひどく叱られ、家に帰られ

た。ちなみに天宮城さんは「散々叱られたんでしようから、私は何も言わないわ。お帰りなさい」と言つて豪勢なお肉料理を振る舞つてくれた。

一応ピーマン料理もあつたものの、お肉料理で中和して食べることができて助かつたなあ。

そして現在、僕は家のソファで寝そべつている。

「あー……暇だなあ……」

僕の行動には色々と問題があつたみたいで、数日間謹慎処分となつてめちゃくちゃ暇しているのだ。

涼牙はもう配信飽きて切つちゃつたし、ペツトたちのお世話も終わつたし、宿題もないし……何しようかなあ。

『クルルウ』

「ピ一助、スマホつつかないでー」

『露靄鳥ハタタドリ』のピ一助にスマホを突かれて邪魔されつづ、何か良い暇つぶしはないかと画面をスワイ

させる。

そんな時、ふと見慣れた顔が画面に映つた。

「……あれ、『凜理』だ」

僕の幼馴染の一人で、凜理というちょっと変わった女の子が突如画面に映し出される。『リリーお嬢様のダンジョン配信チャンネル』というチャンネルで配信していた。

そういえばだいぶ前にメールで「配信するから見てくださいね」と言われたよくな……

「せつかだし見てみよ！」

タップをし、凜理の配信を見ることにした。

# # #

金色のハーフアップに翡翠色の目を持ち、フリフリのドレスと剣を持つこの人こそが凜理である。Dランクのダンジョンで配信しているらしく、バッサバッサとゴブリンたちを薙ぎ払っていた。『ふー。この程度の魔物は話になりませんね。ここいらでワタクシ特製のお紅茶でも飲んで休憩しましょうか』

..さすがでお嬢様

..お紅茶の時間ですな

..ゆつくり休憩しましようお嬢様

..「ブリンを倒す姿は惚れ惚れしますね

..このコメ欄なんだ……？

..→リリーお嬢様のコメ欄は洗練された執事リスナーが多いのですよ

..洗脳されてそう……

一つ一つの仕草がどれも綺麗なもので、まさにお嬢様の名を冠するには相応しいと思えるほどだ。『うふふ♪ ではもう少し進んだら今日の配信は終了いたしますわ』

その後も、凛とした姿勢や優雅さを見せつけながら配信が続き、リスナーさんたちを魅了していた。僕は普段の彼女の姿を知っているので、なんともむず痒い気持ちになるけど。

『では、また次の配信で会いましょう。それでは、ごきげんよう～♪』

..ごきげんよー！

..もう終わつちまつたか……

..別の配信見てから来ただが、すぐ終わつちまつたな

..今日もお美しかったですね

『…………。ふう、配信終わりましたね』

「あれ？」

カメラの停止ボタンを押したかのように見えたが配信は終了しておらず、そのまま凛理の姿が映し続けられていた。配信の切り忘れだろうか。

リスナーさんたちも同じように思ったのか、なんとかして知らせようとするが、全く気がつく素振りはない。

すると――

『……ん？ なんだか悲鳴が聞こえた気がしますわね……。めんどいけど行きましょうか』

凛理はそう口にして、ダンジョンの奥へ進み出す。

..おつと?

..一瞬なんか、キャラ<sup>は</sup>剥<sup>は</sup>がれかけてたようなw

..盛<sup>は</sup>り上<sup>は</sup>がつてきまし<sup>は</sup>た

..お嬢様<sup>は</sup>気づいてください!

..まだ配信中だぞお――

..こ一<sup>は</sup>れは大変なことになつてきたなww

ずっと配信はつけっぱなしだが、凛理はお構いなくダンジョン内を散策し、悲鳴の主と思われる

人物に遭遇していた。

壁に張り付けにされている女性がおり、助けを求めている。

『あ、あの！ 助けてください！』

..なんか……変じやね?

..顔に違和感ある希ガス

..『不気味の谷』現象つてやつだな

..これミニックの上位互換じやね?!

..Dランクダンジョンだぞ?

..イレギュラーだ!!

..しかも時間経過で出口も塞いでくる厄介な魔物

..リリーお嬢様もしかして知らないんじや……

..やばいやばいやばい

凛理は『ふむ』と唇に指をつけて考え込んだあと、こう言い放つた。

『ドMの方でしたか。お邪魔して申し訳ございません』

『違うに決まってるでしょ！ 魔物に囚われたから助けてほしいの！ 気分が悪くて今にも吐きそ  
うで……』

『ああ！ それならご安心を。ワタクシ、他人がゲロを吐く姿を見て興奮する性癖を持つておりますの♪』

……うーん。

どうやら、凜理の化けの皮が剥がされ始めたみたいだ。

..え……？

..今、なんて？

..草ア！ WWWWW

..【悲報】リリーお嬢様、他人のゲロ見て興奮するやべー女だったWWW

..放送事故

..オイオイオイオイ

..盛り上がってきたーーー！W

一応凜理に配信をつけ忘れているというメールを送ったのだが、たぶんもう無駄だろう。

『え……は？ な、何言つてるの……？』

『何を言つている？ それはそちらではなくつて？ しゃべる暇があるならとつとと吐瀉物じしゃくぶつぶち撒きあそばせ？ さもなくば腹パンして吐かせますわ』

『や、やばい女だ……!!』

..魔物にやばいと言わせるお嬢様草

..おもしれーやべー女

..正体現したわね

..なW にW こW いW つW

..汚お嬢様だった

..もうあと戻りできないゾ♡

..現在進行系でキャラ崩壊中♪

..今北。お嬢様嘘うそだよな……？

..大マジなんだよなあW

ボキボキと指を鳴らし始める凜理に対し、彼女の理不尽さに驚きを隠せない人型の魔物。

こうなつたらもう止められないかなあ。

『本当にピンチなのですか？ 先ほどは、魔物に囚われて今にも吐きそうで、とかなんとかほざいていたのに……』

『ピンチよ！ バカじゃないの！！？』

凜理の表情が変わる。凜理も気づいたらしい。

『あ？ テメエぶち殺……いや、まだもつたいないですわね。えー、まず貴女の言葉暴力罪、ワ